

## 太平洋戦争前後の賀茂高女

### 戦時下の賀茂高女

一九三六（昭和十一）年以降、戦時下の賀茂高等女学校はどのようなものであったか、ふりかえって記しておきましょう。

教育内容は、戦時体制に向けて精神力、体力増強のための鍛練が年々強化されていきました。一九三六（昭和十一）年七月には、本校の講堂で愛国婦人会の下部組織といえる「愛国子女団」の発団式が行われました。

翌年、補修科生の夏休みの宿題は「千人針」の作成でした。「千人針」とは、一枚の布に千人の女性が赤糸で一針ずつ刺して縫い玉をつくり、出征兵士に無事を祈って贈るものです。



また、学校では「皇軍慰問袋」作りの時間もありました。慰問袋は出征兵士を慰めるために前線へ送った袋のことで、袋の中には婦人会などによって集められた薬や日用品などが入れられました。

毎月一回は鍛練遠足があり、制服、黒の長靴下で白鳥山、竹林寺、原ゴルフ場などまで往復しました。いくら暑くても靴下を脱ぐことは許されませんでした。一九三八（昭和十三）年になると、勤労報国隊旗のもと勤労作業が行われるようになりました。真夏の太陽のもと、白鉢巻き姿で黒瀬川から砂利運びをしたり、出征兵士を送り出した農家の田植え、稲刈り、植林などの奉仕作業が続きました。

一九三九（昭和十四）年五月、「青少年二賜りタル勅語」が発せ



られ、文部省から夏期休暇を学生・生徒の心身鍛練にあて、「集団勤労作業等を行う」ように指示が出されました。このような非常態勢の中でも心の豊かさは失わないようにと、校内では細々ではありましたが音楽会、展覧会、運動会、球技大会などが行われていました。

一九四〇（昭和十五）年十一月には、政府の提唱によって全国津々浦々まで「皇紀二千六百年記念」の行事が行われました。本校では、紀元二千六百年を祝して、記念館の鎌入れ式が執り行われました。

翌年、完成した記念館で開催された展示会では、被服、手芸、生花、調理など多岐にわたって展示され、内容豊富なものとなりました。

## 命がけの卒業式

当時、二五歳未満の無職の未婚女性は挺身隊員として動員され、進学者、就職者以外は全員が軍需工場で働くことになっていました。本校の卒業生、および補習科、研究科生も挺身隊員として派遣されました。記録によると、「一九四四（昭和十九）年一月賀茂高女同窓会挺身隊三〇名出動 広海軍第十一空廠に配属。同年三月新規卒業生挺身隊四九名出動 呉海軍工場に配属。本科および専攻科卒業生の一部で構成される。同年六月 新規卒業生第二次挺身隊八名出動 諏訪神社で祈願祭行われる。」とあります。

一九四四（昭和十九）年三月には、学徒勤労動員通年実施が決定され、卒業生への動員命令だけでなく、在校生へも動員がかけられています。

四年生は、広十一空廠発動機部第二工場で飛行機部品の研磨作

業に従事しました。この工場の宿舎は、大広間に棚つき二段ベッ

ドが並べられ、部屋の中央には大机がありました。暖房はなく、

寝具は各自が持参しました。食事は大豆七、米三の代用食、副食

には魚が付きましたが、呉空襲のあった一九四五（昭和二〇）三

月以降はこれも出なくなりました。

このころの服装は国防色（黄緑色）の上着とズボン一着が貸与

され、着替えとして制服上着ともんぺを着用しました。そして常

時、頭には日の丸の付いた鉢巻きをしていました。

一九四五（昭和二〇）年の春まだ浅い三月二八日、四年生が集

まり、動員先の宿舎でささやかな卒業式が行われました。しか

し、祝辞の途中で空襲警報が発令されたといひます。命をかけた

卒業式でもありました。

卒業後、生徒たちは他の工場に就職した者を除き、女子挺身隊

員となりました。身分は変わりましたが、工場での作業にも宿舎

での生活にも変わりはありませんでした。ようやく帰郷を許され

たのは、卒業式を行った春から暑い夏に季節が変わった八月一六

日、戦争終結にともなつてのことでした。

一方、三年生・二年生は、陸軍被服廠賀茂学校工場へ、通年動

員が実施されました。一九四四（昭和十九）年十一月、賀茂高女

本館二階の三教室が軍衣の縫製工場となり、翌年の一九四五（昭

和二〇）年一月まで三年生が縫製作業に従事しました。広海軍工

廠に転属になった後は、二年生に縫製作業は引き継がれ、新三年

生となつても八月十五日まで縫製工員として働きました。

学校工場の設備は、一教室当たり家庭用ミシン二〇台を教室の

窓側に二列に並べ、中央に裁縫机三個と椅子、廊下の窓側に裁縫

机三個がアイロン台として置かれていました。

ここでは軍衣が縫われ、防暑襦袢（夏用シャツ）と袴下（ズボ

ン）、防寒襦袢（冬用シャツ）と袴下（ズボン）の縫製と、雨外套

のボタン穴かがりとボタン付けを行っていました。

朝早くから夕方は遅くまでの作業のため、遠距離通学生は寄宿

舎に收容されました。寄宿舎の食事は乏しく暖房もありませんで

した。セーラー服にモンペをはき、陸軍の星のマークの付いた白

鉢巻きをしめて登校し、四年生と同じく一日中はずすことはありません

ませんでした。

## 賀茂高女救援隊、被爆地へ

一九四五（昭和二〇）年、八月六日午前八時、学校工場の作業

を開始して間もなく、快晴の天気の中で稲妻のような光が見えま

した。作業が一段落して休憩時間になったときのこと、西の窓

越しに「きのこ雲」を発見した生徒がいました。全員が外に出

て、西の空を見つめながら言いようのない不安にかられました。

午後になると被災者が西条駅にも帰ってきて、ピカドン（原爆）

の惨状がだんだんとわかってきたのでした。

八月十五日には終戦の詔勅が下り、学校工場も閉鎖となりまし

た。講堂に山と積まれた軍の衣料品の中から、動員者一人ずつに

物資が配給されました。毛布二枚、防寒用シャツ、ズボン、代用

毛糸一ポンド、軍靴一足でしたが、物資不足のこの時期、生徒は

大変喜んで持ち帰りました。こうして軍事動員は解除されたので  
す。

ところが、学徒動員体制を解かれたのも束の間、いったん各家  
庭に帰った生徒に対して、広島県知事、広島市長より原爆被災者  
の救援が要請されました。八月十七日には、帰宅中の生徒に口伝  
えに伝達され、賀茂高女救援隊が編成されました。

救援隊は直ちに、広島市内のかろうじて倒壊をまぬかれた学校  
や逓信局、被服廠に向かい、治療の手伝い、救援炊事などに従事  
しました。この動員に参加した生徒たちもまた原爆の第二次放射  
能を受けたことを忘れることはできません。救援活動に参加した  
生徒たちが、ここで経験したこの世の生地獄は、その後の平和へ  
の強い願いとなって今日に続いています。

授業再開は、九月下旬になってからのことでした。都会からの疎  
開生徒に加え、外地よりの引揚者も加わって、

生徒数はふくれあがりました。教室、札も足りません。宿直室  
二階の和室に裁縫机を並べ、寺子屋式で生徒も教員も半年間が  
ばりました。

四年生が机に就き、黒板に向かうのは十カ月ぶり、戦時下にあ  
って、まともに勉強するのは二年ぶりくらいとなり、全員が学習  
に励めることをよろこび合いました。

ただ地理、歴史、国語の教科書の一部には墨塗りを指示され、  
まだまだ統制下での勉強を強いられるものでした。

